

現代自由民主主義の諸問題

ケビン・M・ドーク

(訳) 山岡 鉄秀

こんにちは。武漢ウイルスの大惨事による長期不在からここ麗澤大学のキャンパスに戻ってこられたことは本当に嬉しく光栄なことです。まず最初に、私のキャンパスへの復帰を可能にしてくれた人々——廣池幹堂理事長、犬飼孝夫道徳科学研究所

所長、川久保剛麗澤大学国際問題研究センター長に感謝したいと思います。また、今日は私の良い友人である山岡鉄秀氏が通訳として手伝ってくれるのも嬉しいことです。このテーマについては、私よりも山岡さんの方が良い話ができるに違いないと思います。いずれにせよ、私の発言よりも、彼の日本語訳の方が聞く価値があるかもしれません。

話を始めるにあたり、私が「現代自由民主主義の諸問題」というテーマでお話することに少し不安を感じていることを認めなければなりません。これは私の専門である近代日本思想、

特に田中耕太郎や吉満義彦のような日本のカトリック思想家の研究とは大きくかけ離れた学問分野です。その上、今日この部屋には、リベリズムの問題点について私よりも優れた講義ができる人が大勢いるのです。

私が最近のリベリズム批判に関心をもったのは、主に日本の知的歴史の研究の中で、この問題につまずいたからです。しかし、皆さんにもこれから明らかになるように、私は政治思想の専門家ではありません。これは、ポストリベラルの民主主義批判という比較的新しい現象に関心を持つ者の感想であって、リベリズムやその批判者の問題について権威ある発言をするものではない、ということ念頭に置いて私の発言を受け止めていただきたいと思います。

日本の保守派にとつての難問としての自由民主主義

まず、難問から始めましょう。私が考える自由民主主義批判の基本的な問題は、日本にとつて自由民主主義が戦後の過程を経て、正当に誇るべき「名誉の印」(Badge of honor)となつたということです。戦後初期の数十年、自由民主主義は多くの日本人にとつて、戦時中の軍国主義的な支配からの解放であり、ようやく生きる価値のある人生を得た証であると考えられていました。

近年では、日本の自由民主主義の立ち位置は、共産主義中国の政治文化とより対照的です。日本は自由民主主義のおかげで素晴らしい生活の質を享受しています。自由民主主義は、日本のヌーボーリッチ(成金)な隣人である共産主義者の影響力に対する文化的防波堤となつています。自由民主主義は、アメリカの占領下で押しつけられたものであれ、大正時代に日本が独自に行つた実験に根ざしたものであれ、成功の証であり蔑ろにすべきものではない、そのように言われています。

さて、難問です。近年の保守思想の最も顕著な進展は、リベラリズムとそれに伴う自由民主主義に対する正面からの強力な攻撃です。もし自由民主主義の主な批判者がマルクス主義者であつたなら、我々はそれほど心配する必要はないかもしれせん。しかし後述するように、どちらかといえばマルクス主義者と自由民主主義者は世界の多くの国々で互いに和解しているよ

うに見えます。そして共産主義に最も強く反対してきた保守派が、今やリベラリズムと自由民主主義への攻撃を主導しているのです。

では日本はどうなるのでしょうか。もし日本の保守派が、日本の文化や社会を共産主義中国のそれと区別し続けたのであれば、現代の保守派によつて世界中で行われている自由民主主義に対するこうした攻撃にどう対応すべきなのでしょう。もし自由民主主義の擁護に固執すれば、彼らはリベラリズムを受け入れるようになったマルクス主義者の手に落ちることにならないでしょうか。そしてもし彼らが全世界の保守派と一緒になつて自由民主主義を攻撃するならば、自分たちと共産中国を区別するものそのものを放棄することになるのではないのでしょうか。どうすればこの不可能な企てを実現できるのでしょうか。

難問に直面したときには、慎重に元の場所に立ち戻るのがよい考えだと思えます。私の専門は日本研究ですから、まず一九二〇年代に立ち戻つて、民主主義の限界について多くの価値ある発言をした——これはおそらく驚くべきことなのですが——先見の明のある日本人の思想家に話を聞いてみたいと思えます。その人とは、麗澤大学やモラロジーという学問の創始者である廣池千九郎です。いわゆる「大正デモクラシー」の時代に提案された彼のいくつかの考えに接して、私は非常に興味深い

と思いました。

一九二八年に出された彼の名著『道徳科学の論文』（英訳は *Towards Supreme Morality*（最高道徳をめざして）2002）の中で、「デモクラシーもしくははデモクラティズムをもつてしては人類の幸福は得られず」という見出しで、廣池は「一切の事みなデモクラシーによりて解決し得べしとなすのであります。これは大なる誤解であります」と述べ、さらに「選挙権のごとき、一般投票もしくは普通選挙権のごときも、道徳心と相伴うときにはその弊害少なかるべきも、もし然らざるときには大害を生ずるに至りましょう」と述べています。¹⁾

ここでは、今日私たちが「自由民主主義」と呼んでいるものに対するバランスのとれた批判がなされています。廣池はデモクラシーを全面的に否定しているわけではありません。しかし彼は、人類が直面するあらゆる問題を民主主義が解決できると考えるときに問題が生じることを極めて正しく指摘しています。それはつまり、道徳的な基盤のない政治でも十分事足りるだろうと考えるときです。それゆえ廣池は「道徳を伴う限り」デモクラシーとその制度が全く価値を持たないわけではない、と強調しているのです。

しかし、彼が自由民主主義の重要な問題点を見抜いていたことは「近世物質的文明の進歩と、デモクラシーの思想の普及とは、各国の主権者及び貴族の神秘性及び神聖性を減じつつあ

る²⁾という鋭い指摘からも明らかです。つまり廣池は、健全な道徳的基盤に繋がっていないデモクラシーは人々の幸福実現に失敗するであろうということ、そして彼の時代においてすでに、道徳的価値からの解放を求めるリベラリズムの世俗的な態度がデモクラシーを脅かしつつあったことを先見的に理解していたのです。

現代保守のリベラリズム批判について

次に、リベラリズムや自由民主主義に対する現代の批判者を何人が取り上げ、その主張を明らかにした上で、日本がそれらの批判をどの程度取り入れることができるか、あるいは取り入れるべきかを検証したいと思います。まずフランスの著名な政治理論家であるピエール・マンナンから始めましょう。二〇〇六年に出版された *A World beyond Politics? A Defense of the Nation-State*（政治を超えた世界？ 国民国家の擁護）の中でマンナンは、近代民主主義を特徴づける分離のカテゴリーとして、「職業の分離あるいは分業、権力の分離、教会と国家の分離、市民社会と国家の分離、代表者と代理人の分離、事実と価値、あるいは科学と生活の分離」という六つの大きなカテゴリーを挙げています³⁾。この教会と国家の分離が、リベラリズムが台頭している国ではどこでも政治秩序の世俗化をもたらしていることに私たちはすぐに思い至るでしょう。これはまさに廣池が二十世紀初

頭にすでに懸念していた道徳的原理を放棄する行為です。しかしマナンは、問題はそれ以上に広く深くなっていると指摘します。

自由民主主義が現代の社会生活に持ち込んださまざまな分離線は、まさに何世紀にもわたって個人が人類の繁栄に必要な基盤を見出してきた結合の場である社会そのものへの攻撃なのです。私自身の研究から日本の場合についてつけ加えると、長く議論されてきた神道の社会的位置づけと信教の自由に関する問題はしばしば一種の「政教分離」(separation of church and state) 教会と国家の分離) 論争を引き起こしますが、これは日本という文脈においてはむしろ人為的な印象を与えます。

しかしそれ以上に根本的なのは、戦後日本の自由民主主義を特徴づけている「国民 nation」と「国家 state」の分離です。Minzoku としてであれ kokumin としてであれ、日本の国民(nation) は、自国民に対して一種の内部植民地化を実施したように見える戦後の自由主義的な国家(State) によって様々な形で疎外されてきました。安倍晋三首相が在任中に行おうとしたことの多くは、国民と国家の関係を是正することであり、特に kokumin としての国(nation) に焦点を当てたものでした。安倍首相の悲劇的な暗殺によってこのプロジェクトは、現代日本の政治という営みにおいて大きな未完のプロジェクトの一つとなってしまうました。

自由民主主義が煽るこうした分離の意味を知るために、現代アメリカの政治理論家クラッデン・パッピンに注目しましょう。パッピンは、マンナの近代民主主義における分離のカテゴリーをベースに「リベラリズムが歴史的に結合されていた事柄を分離しようとした」ことを強調します。「分業は利益の最大化を可能にする。三権分立は、近代国家が暴政に屈することなく権力を保持することを可能にする。政教分離により、教会は福音を伝えることができ、国家は市民的な目標に集中できるようになる。市民社会は国家の干渉を受けずに繁栄する。間接民主主義は直接民主主義を必要とせずに民主主義の恩恵を享受することができる。そして最後に、科学が自由に知識を追求できることは、人類にとって全く有益なことであろう。」⁴しかしパッピンは、マンナが下した診断から十五年後、「現在、西欧民主主義国を特徴づけているのは、この分離の動きではなく、むしろ分離のシステムに対する反応である」と指摘しています。⁵

彼は、この分離に対する反応が、共和党の有権者やトランプに対する彼らの態度に最もよく表れていることを発見しました。というのも、民主党は近年、それまでのリベラリズムへのコミットメントをほぼ放棄し、左派への急激な転向を優先しているからです。

アメリカの経済や政治において生き残ったリベラリズムの要

素は、しばしば共和党有権者の深い構造の中に埋没してしましたが、最近になって三つのグループとして、そしてリベラリズムによって生み出された分離に対するそれぞれの反応として表面化しています。パッピンはこの三つのグループを、①トランプに反対し今も反対している人々、②当初はトランプに懐疑的だったがナシヨナリズムの大義に結集している人々、③トランプ大統領就任を機に新右翼思想を推し進める人々、に区分しています。パッピンは、三つのグループすべてに内在する問題を発見しましたが、特に最初の二つのグループに問題があると考えます。

第一のグループは現代アメリカ政治を形成する動きから外れており、パッピンが言うところの「共和党全体にほとんど基盤を持たない、献金者に支援された似非インテリの集団」です。第二のグループは「外交・移民政策には長けているが、より広範な政治的再編の意味についてほとんど語ることがない」のです。このグループには、保守政治行動会議(CPAC)、ターニングポイントUSA(とその指導者チャーリー・カーク)、ベン・シャピロのようなメディア関係者が含まれ、彼は「政治運動をマネタイズしようとするメディア関係者は政府の使い方についてまったくビジョンを持っていない」と言っています。パッピンは、自分を第三のグループに位置づけています。このグループはリベラルな国家観に対して根本的な批判を行なっ

ています。「平和の番人、個人の自由の守護者としての国家は、充分な答えではない。」したがって「国家の方向性を修正することが必要である」と結論づけています。

さて、私はこの「平和の番人、個人の自由の守護者」というリベラルな国家観は、戦後の日本国家に対する見方として(日本の多くの政治的保守派の間でさえ)支配的だと思うので、これに対するパッピンの批判と国家が新たに進むべき方向の提案は日本人にとって最も関心のあることかもしれない。しかし、この考えを日本に適用することはひとまず保留しておきましょう。日本への適用可能性については最後に結論として述べることにします。

こうした分離と分離への反応に対するマナンとパッピンの関心はポール・ラエの二〇〇九年の研究 *Soft Despotism, Democracy's Drift* (ソフトな専制君主制、民主主義の漂流) にも反映されています。ヒルズデール大学の歴史学教授であるラエはリベラリズムの知的起源、特にモンテスキュー、ルソー、トクヴィルの思想に深く踏み込んでいます。ラエは、冷戦の終結が非共産圏の幸福や充足感につながらなかったという発見に動機づけられました。むしろ冷戦終結後、主要な民主主義国家において不安と不満の心理が生まれ、それが数十年にわたって持続していることを発見したのです。

彼はこのような自由主義への不満の理由を、現代の自由民主

主義国家が「ソフトな専制主義」に傾きつつあることに求めています。この傾向は、国家権力が拡大し民主的な自治の実践が次第に損なわれていく状況を意味します。なぜこのようなことが起こったのでしょうか。

ラエは、アレクシス・ド・トクヴィルが一九世紀初頭のアメリカの民主主義に関する彼の考察の中で、この傾向の発生（源）を最初に特定した一人であると考えています。トクヴィルがアメリカで発見したものは彼を勇気づけ、また不安にさせました。ラエによれば、トクヴィルの心配は、「彼が『個人主義』と名づけた現象に気づくことによってさらに悪化した。この言葉自体が新しいものであった。彼はこの言葉は『新しい考えを生み出すために最近作られた表現』であると認めた。（中略）彼は『個人主義とは、よく考えられた平和に資する感情であり、一人ひとりの市民を自分によく似た性質をもつ人々の集団から孤立させるように仕向けるものである』と書いている（傍線は筆者による）。これは極めて危険な傾向である。そしてこれは、平等な状態にある人間はほとんど何も頼るものがない状態で、ほぼすべてを自分自身の考えと行動に委ねられているという事実から生じている。（中略）「このように、民主主義は各人に自分の先祖を忘れさせるだけでなく、その子孫を隠し、同時代の人間から引き離す。」（中略）最後に、そして何よりも重要なのは、このように孤立した人間は、世論の圧力に抵抗して

戦いを挑むことができる状態にはない、ということをとクヴィルがほのめかしていることだ。⁶ 驚くべきことにトクヴィルは、マナンがリベラリズムの「分離」の傾向を明確にする一七〇年前に、市民を互いに孤立させる自由民主主義のこの傾向を特定していたのです。

今日、アメリカで最も重要なリベラリズム批判者は、ノートルダム大学政治学教授で二〇一八年のベストセラーである *Why Liberalism Failed* の著者、パトリック・デニンかもしれない。この本は二〇一九年に角敦子氏によって日本語に訳されています（『リベラリズムはなぜ失敗したのか』原書房）。デニンはこの著書の序で、なぜリベラリズムが失敗したのかという問いに、「リベラリズムは失敗した。リベラリズムを実現できなかったからではなく、リベラリズムに忠実だったからである。成功したために失敗したのだ」⁷と答えています。

このパラドックスは何を意味するのでしょうか。まず、リベラリズムが約束したものと、それがもたらしたものととの間にギャップがあることが挙げられます。「リベラリズムが『完成形に近づく』につれて、『リベラリズムのイデオロギーは実現されているがその主張通りにならないという病弊が生じた。平等を促進し、さまざまな文化や信念が織りなす多元的タペストリーを擁護し、人間の尊厳を守り、そしてもちろん自由を拡大するために世に送り出された政治哲学が、現実にはとてつもな

い格差を生み、画一化と均質化を押しつけて、物心両面での墮落を助長し自由をむしばんでいる」とデニーンは指摘します。⁸⁾

リベラルな社会が、今日、平等主義的でなく、多元的でなく、自由でなくなつたという事実を否定することはできません。しかし、なぜこのようなことになつたのでしょうか。

デニーンは、このような不愉快な現実をもたらしたりベラリズムの狡猾な論理に深く切り込んでいきます。基本的に彼は、価値と実質について中立を装うリベラリズムの論理が、リベラルな社会で必然的に生じる本質的に矛盾した主張の前では、最終的にいかに中立を保てないかを明らかにします。相反する主張の間には最終的な仲裁が必要であり、リベラリズムはそれを基本原理である個人の自由と一致させます。

デニーンの言葉を借りれば、リベラリズムは「人類的個人主義」と「選択の自発的概念」に暗黙のバイアスをかけていることとなります。前者は、自由とは家族や伝統など他者が真実や善として支持するものに反して個人が行動し信じることができるといふ急進的な個人主義の哲学を意味するものです。

後者は、自由とは自分が望むものを選択できることであり、その選択の自由には自然そのものにさえも制約や制限がない、というものです。この二つの考え方は、日本語の「自由主義」という言葉によく表れているように思います。

重要なのは、このリベラリズムの概念が、「リバタリアニズ

ム」あるいは一種のアナーキズムと呼ぶにふさわしいものを導入しているということです。もしすべての人が、自分が真実であり善であると考えるものを自由に選択できるとすれば、もし自由とは多くの人の利益よりも個人の希望を優先させることであるとすれば、社会はどのように機能しうるのでしょうか。統治はどのようにして行われるのでしょうか。

リベラリズムは、こうした対立を裁くためにいかなる実体的・道徳的原則にも訴えることができないので、力に頼るしかありません。そしてついには国家権力に頼って、伝統に対して、多数派に対して、あるいは自然そのものに対してさえ、個人主義の原則を強制するのです。それゆえ、デニーンは、「リベラリズムの拡大の根本にあるのは、国家が拡張して個人の分裂という目的を達成すると、次には共有された規範や慣習、信念を失った社会を支配するために、さらなる国家の拡張が必要となるという、負が負を呼ぶ悪循環である」と指摘しています。

「したがって、リベラリズムはさらなる法的・行政的な制度を必要とするようになり、(中略)市民のあいだに深く根づいている将来や運命についての共通の意識を」空洞化させてしまふ。」「公的でない人間関係が行政指導や政治政策、法的規制にとつて代わられて、自発的な市民の関わりが阻まれるなか、拡大しつづける国家機関が社会的協働を受け合うよう求められて

いる。⁹⁾

デニーンは、リベラリズムが国家権力を低下させるのではなく、増大させるという驚くべき結果をもたらし、リベラリズムとは「個人主義と国家主義を統合する」機能であると述べています。この点でも、彼のリベラリズムの分析は今日の日本にとって重要な示唆を与えていると言えるのではないのでしょうか。

今日の「キャンセルカルチャー」の出現にも、同じリベラルの論理が働いています。少し前までは、リベラリズムといえバヴォルテールの「あなたの言うことには全面的に反対だが、あなたがそれを言う権利は死んでも守ります」という原則を支持するものだと思われていました。私はそのような考え方で育つたことを覚えています。しかし今、支配的な社会規範は次のようになっているようです。「もしあなたの意見に反対なら、私はその意見を封じ、あなたの発言を阻止し、最終的にはあなたに対して暴力を行使する。」

私たちは、中絶に関する憲法上の無制限の権利を否決する裁判所の判決をめぐって、最高裁判事を暗殺しようとした事例を目の当たりにしています。ここ数週間の間にアメリカの学校では、クラスメートから正当な敬意を払われていないと感じたトランスジェンダーによる激しい衝突が相次いでいます。そしてよくご存じのように、ナッシュビルではトランスジェンダーが

六人（うち子ども三人）を射殺する事件が起きてしまいました。

これらのケースに共通しているのは、理性とオープンな議論が異なる意見を調停する最善の手段であるという伝統的なりべリズムの信念が否定されつつあることです。実際、最近まで伝統的で健全だと考えられていたいくつかの考えが、「多様性 (diversity)」、平等 (equity)、包括 (inclusion) を基盤とする社会では不道徳で受け入れがたい、存在する権利がないものとみなされています。伝統的な見解を持つ者は、小学生であろうと最高裁判事であろうと「包括」されてはならない——つまり、存在する権利がないのです。

この新しい展開は、デニーンが「反民主的リベラリズム」と呼んでいるものに合致しています。その考えによれば、「民主主義が正当化の手段として受け入れられるのは、その実践がリベラリズムの前提の範囲内にあるとき、もしくはおおむねその支えになっているときにかざられる。(中略) 民主主義の多数派がリベラリズム的な見解を拒絶すると、指導的立場の人間から一斉に民主主義と大衆の愚かさを見難する声があがる。¹⁰⁾」そしてより多くの場合、主流メディアはそのような多数派の意見を報道から単に消し去り、その意見は公共の場から消えてしまうのです。

デニーンのリベラリズム批判は逆説の上に成り立っており、

時に難解なこともあります。英国の政治哲学者フィリップ・ブロンド（「ジエームズ・ボンド」ことダニエル・クレイグの義兄弟）は最近、ポストリベラルのリベリズム批判を簡潔にまとめ、リベリズムが政治的、哲学的、神学的に何を行っていかを概説しています。その内容は非常に優れているので、ここで少し長めに引用する価値があります。

政治的には、リベリズムはその約束とは正反対のことに実現している。伝統や社会的結束、共有価値の形成の重要性を否定しているため、リヴァリアサンに警察を依頼するような、分裂し、戦争する民衆を生み出してしまふのだ。リベリズムは反国家主義であるどころか、国家を絶対主義的な警察権力として導入し、権力を持ち豊かになった少数派が被支配者である多数派に対して党派的に支配することを保証している。それが確保する自由は、捨てられる自由、家を持たない自由、アメリカの高速道路の草むらにテントを張る自由である。（中略）自由主義の究極の政治的遺産は、家族や友人を失い、絶対主義国家と独占市場に対してまったく無力な、孤立した個人である。

哲学的には、リベリズムは自由な人間の意志の行使を基礎としている。存在論的には、リベリズムは、普遍的に存在し、認知可能な客観的世界に我々が住んでいるとい

う考えをすずに放棄しているのである。その代わりに、人間のフィクションが真実に取って代わり、その上に君臨している。例えば、性別は変幻自在となり、男性は女性であると主張され、女性は存在論的な区別と目的を失っている。リベリズムは、家長制や家庭内抑圧から女性を解放するどころか、完全に置き換えてしまったのだ。

神学的には、リベリズムは信念において無神論者であり、実践において虚無主義者である。リベリズムは客観的な財の存在を否定する。世界の現実から客観的な普遍性を排除し、主観的な主張で置き換え、残酷なパロディで自分こそが唯一の普遍であると宣言する。このような考え方ももとで私たちが知ることのできる唯一の法則や制約は、私たちが自らに与えるものである。人間的なものはずべて新しい神性として再構成され、人間的なものはずべて最も強力な者の主張へと貶められるのである。¹¹

リベリズムに代わるものとして、ブロンドが提唱する「レッド・トリーズム」は、ラディカルな共同体主義的伝統保守主義であり、イギリスと同様、イギリス国王に対するアメリカ革命の過激な影響力が君主制の廃止に至らなかった日本では一定の魅力を持つかもしれません。しかし、ブロンドと彼の「レッド・トリーズム」についての詳細な議論は別の機会に譲

らなければなりません。

リベラリズムを批判するもう一人の重要なアメリカ保守主義者は、ソフラブ・アーマリです。アーマリはウォール・ストリート・ジャーナルとニューヨーク・ポストの元ジャーナリストで、コンパクト誌の創設者兼編集者であり、ザ・アメリカン・コンサバティブの寄稿編集者でもあります。テヘランで生まれ、一九九八年、十三歳のときに米国に移住しました。

アーマリは二〇一六年にカトリックに改宗しています。フィリップ・ブロンドのような制度的・文化的伝統主義に染まらず、パトリック・デニンほどにはアメリカ文化の特殊性に特化しないリベラリズム批判を我々に提供してくれます。つまりアーマリのリベラリズム批判はよりグローバルで多文化的な背景から生まれたものであり、日本の保守派がリベラリズムと対峙する際に応用できる教訓を与えてくれるのではないのでしょうか。

アーマリは、古典的自由主義を擁護する保守派のデイヴィッド・フレンチを批判し、彼がデイヴィッド・フレンチ・イズムと名づけた、「技術主義的市場社会の制度は、伝統的キリスト教と自由主義的方法や異教徒化した思想の両方を受け入れることができる中立地帯である」という考え方を定義したことで有名です。

アーマリは、フランスの古典的リベラリズムは、保守派をア

メリカ（およびその他の地域）で激化している現在の文化戦争の片隅に置き去りにし、重要な局面で政治的に無力な存在にしていると主張します。彼は、二〇二一年に出版した *The Unbroken Thread: Discovering the Wisdom of Tradition in an Age of Chaos*（切れ目のない糸―混沌の時代に伝統の叡智を発見する）の中で、リベラリズムのイデオロギーに対する批判を数多く提起しています。

まず、リベラリズムをトランスヒューマニズムの専制と結びつけ、人間を性そのものから解放しようとする最近の試みが家族に及ぼす悪影響を強調します。「社会的リベラリズムは、個人を自然から、つまり秩序ある、目的指向の現実としての自然から、絶え間なく遠ざけている」と、アーマリは説明します。「このことは、家族に関して特に顕著で、今やほとんど完全に、十年前には考えられなかったような方法で組み替えられるようになっていく。次の展開は、生物学的につながりのない人たちが、性的な関わりの有無にかかわらず、互いに母親、父親、兄弟の役割を果たし、疑似家族を形成する「選択家族」であると考えられる。」¹³⁾

ここで私は、廣池が自然界の普遍的な法則を「社会構成の真の原理」、「人類進化の真の方法」¹⁴⁾として語ったこととの類似に驚かされるのです。もちろん、廣池は今日のような家族のあり方や、人間のセクシュアリティや家族の定義に関する議論な

ど、想像もしなかったでしょう。

廣池は、現代のリベリズムがマルクス主義とともに神なき世界観に転じた際に最終的に放棄した原理そのものを特定したことを評価されるべきでしょう。人間が責任を負うべき至高の存在である神を否定したことが、リベリズムとマルクス主義との間に、それ以前の世代には想像もつかなかった結びつきを見いだしています。

アーマリは「西欧型のリベリズムと共産主義は、すべての自律的な人間の基本的な善性を信じるという点で共通している」と語ります。「人類をあらゆる自然的・伝統的制約から解放する方法について、集団で行うか個人で行うかの違いはあっても、この二つのイデオロギーは同じ哲学の親から生まれた双子の子供だった。この意味で冷戦下の世界は実際には一体化されていた。二つの世界が、二つの異なるキーで同じメモディーを奏でていたのである。」¹⁵神を認めない共産主義と無神論的なリベリズムの共通点を、アーマリはイランでの幼少期の生い立ちから見抜くことができたのかもしれませんが。

それはともかく、リベリズムとコミュニズムが重要な点で結びついているという彼の主張は、共産主義中国の文化イデオロギーに対する日本にとって最良の解毒剤としての自由民主主義の役割、という難問を解決するために必要な質問を提起していると思います。しかし繰り返しになりますが、我々がリベラ

リズムに対する保守派の批判の概観を終えるまで、もう少し辛抱していただきたいのです。その上で、このすべてが日本にとってどのような意味を持つかについて見ていきたいと思います。ですが、私がこれらの批判の検証を進める間、これらの考え方が日本にとってどのような意味を持つのか、皆様にも引き続き考えていただきたいと思っています。

アーマリの最後の一点は最も重要なものだと思います。アーマリは、ポストリベラルの保守派の多くの人たちと同様に、リベリズムが人々に強制することなく、どの価値観が自分にとって最も重要であるかを自由に決めさせる中立的なシステムであるという考えを否定しています。むしろ彼は、「リベラルな社会は強制するものだ」という信念を率直に述べています。「さらに言えば、人間としての最高の目的を知ることにはできないし、ましてや法制化することもできないという「リベラルの」考え方は、それ自体が形而上学的、さらにはスピリチュアルな主張であり、現代のプロジェクトの中核をなしている。そのリベリズムにおける神は、束縛されない自己である。そのような神への崇拜は、必然的に政治的な結果をもたらす。膨大な資本の蓄積の多くがごく少数の手に集中し、万華鏡のようなライフスタイルを提供する絶え間なく破壊的な文化を生み出し、重武装の商業帝国を築く。」¹⁶

私たちは皆イデオロギー的な立場に身を投じており、伝統的

なりベラリズムとは反対に、中立的な立場は存在しない、というこの立場が意味するのは、強制力を用いる、つまり他の人々が私たちに彼らの価値観を採用するよう強制しようとしているのと同じように、私たちの価値観を採用するよう他者に「強制する」ことが正当化されるということです。

この文化戦争はまさに総力戦であり、これに参加してあらゆる手段を講じて自分の道徳観を強要するか、戦争に負けて他の人の道徳観を採用させられるかのどちらかしかありません。アーマリの深い懸念は、リベラルな道徳観が勝利した場合——廣池が社会が普遍的な自然の法則を否定した場合の結果として暗示していたように——社会は崩壊してしまうだろうということです。

リベラリズムの問題に対するデニーンの解答は、強制性の必要性についてはあまり明確ではありませんが、自分が正しいと信じる道徳観を行使する必要性については、アーマリにはほぼ同意しています。彼のアプローチは、ブロンドほど制度的な伝統に重点を置いておらず、道徳的な伝統により重点を置いていません。彼は、『リベラリズムはなぜ失敗したのか』において、何がリベラリズムにとって代わるべきかよりも、リベラリズムの問題点に注力したことを認めています。近刊の *Regime Change Toward a Postliberal Future* (レジームチェンジ—ポストリベラルの未来へ向けて) では、デニーンは、リベラリズムと自由民

主主義の代わりに何が必要かを概説することで、この短所を補おうとしています。

彼の解決策はブロンドと似ていますが、君主制のような伝統的な制度を尊重するものではありません。デニーンの処方箋は、ジャック・マリタンの「最も経験豊かな道徳と法学の最高権威で構成される」¹⁷⁾最高顧問会議というビジョンを彷彿とさせるものです。しかしマリタンは古典的リベラル派として、この道徳的エリートは国民の直接選挙によって地位を得るべきであり、そしておそらくより重要なのは、彼らがつ「いかなる権力も奪われてしまいかもしれないが、疑いのようなない道徳的権威が与えられる」¹⁸⁾と述べています。

マリタンが一九五一年に国際連合の設立という文脈で提案したことは、今日の多くのポストリベラルの保守派にナイーブで見当違いだと感じさせるものです。彼らは、国連がその設立時の崇高な理想からいかにかけ離れているか、そして現代のリベラリズムを形成し、伝統的道徳に対する戦いを挑んでいるのと同じ勢力によって国連が完全に人質にされているように見えることを指摘しています。

マリタンのように、デニーンは新しい道徳的エリートによる統治を求めています。それは現在の能力主義的エリートと民衆の間の第三の機関であると言えます。デニーンは、この新しい道徳的エリートの背後にある原理を「アリストポピュリス

ム」と呼んでいます。彼は、これは共通善を促進する者であるアリストイの役割を担い、それによって一般市民の生活を向上させる新しい階級だとしています。ここには、廣池が「近代のデモクラシーは、主権者および貴族の神秘性及び神聖性を低下させる」と警告したときに明らかにしたリベラリズムの世俗化に対する回答のようなものがあるのかもしれませんが。

デニーンは廣池のことを全く知りませんが、廣池と同様に、これらの聖なる貴人たちの機能を回復させることを望んでいます。この道徳的ビジョンは共通善に焦点を当てるものであり、デニーンはこれが「分離というリベラリズムの核心的価値観」を克服し、「代わりに、より深く、より根本的で広範な形の統合を探求する」ことを望んでいるのです。¹⁹ デニーンの言う統合とは、経済的統合や人種の統合といった単なる構造的統合ではなく、リベラリズムがもたらした深刻な存在論的・道徳的崩壊の克服を意味します。

この「アリストポピュリズム」の新しい統治エリートは何をすべきなのでしょう。デニーンは、マネンによるリベラリズムが生んだ六つのタイプの分離に立ち返り、新しい道徳的エリートが重視すべき五つの対抗策を提示しています。

第一に、リベラリズムの職業分離に対して、デニーンは「実力主義の克服」(Overcoming Meritocracy) というアジェンダを提唱しています。デニーンは、実力主義における報酬は個人

の努力や自発性の結果ではなく、宝くじのランダム性に等しいと見ています。実力主義による社会の崩壊を再統合するには、個人の才能は社会全体の利益のために与えられているという、旧来のキリスト教的な感覚に戻るしかないのです。

このように、デニーンは、「社会的連帯、家族、コミュニティ、教会、国家といった労働者階級の倫理観と、特権に恵まれた人々に必須である奉仕的な美德を統合することを伴う、「美しい定義」の刷新」を求めています。「そのためには、エリート、つまり「人間として余分なものを削ぎ落とす」べき人たちの側に特別な義務と責任が必要であり、その主な目的は個人的達成ではなく、すべての人の繁栄を可能にする社会、経済、政治秩序への支援でなければならない」のです。²⁰

デニーンは第二の対策は、「人種差別との闘い」(Combating Racism)です。もちろんデニーンが積極的格差是正措置を、永く続いている人種差別への最良の対策としては否定していることには驚きません。積極的格差是正措置(積極的優遇措置)はリベラリズムの能力主義システム、すなわち個人の達成を阻む人種の障壁を取り除けば、人種差別をなくすために最善を尽くしたことになる、という前提に立っているからです。デニーンにとって人種差別に対する最善の対応は、「誰もが神の子」として認められ、互いに認め合うキリスト教的連帯の道徳的価値観に立ち返ることです。

三つ目の対策は、「進歩を超える」(Beyond Progress) ことです。進歩とは、時間を過去、現在、未来に分けることに基づいており、進歩的な体制では未来という時間的方向性に最も即した者が報われ、後ろ向きとみなされた者は罰せられるということ。デニーンは我々に思い起こさせます。彼の処方箋は「進歩のイデオロギーを、継続する実体験に置き換えること」による「時間の統合」⁽²¹⁾です。

第四の対策は、デニーンが「nation の位置づけを定める」(Situating the Nation) と呼ぶものです。ここでまず注目すべきは、デニーンの nation の定義が曖昧で、State (kokka) と市民的・法律的に定義された nation (kokumin) の間を行き来しているように見えることです。

国家 (State) と国民 (nation) の区別は、デニーンにとって完全に興味の対象外です。どちらの形であれ、国家や国民は抽象的なもので、彼がより現実的だと考える地域に根ざした愛着から私たちを遠ざけるものだからです。彼は国家保守主義を否定し、「最も地域的なもの、特に家族を優遇しながら、地域、国家、国際の新しい統合の形、これらすべてのレベルのコミュニティを維持すること」⁽²²⁾を呼び掛けています。

最後にデニーンは、リベラリズムによる地域性の崩壊は、「宗教の統合」(Integrating Religion) を日常生活に取り戻すことによつてのみ是正することができるかと主張します。驚くべき

ことに、特定の宗教についての言及はなく、デニーンによる「宗教」の定義さえありません。このセクションの大部分は、むしろ「共通善」を提唱し、共通善への関心を何とか祈りと関連づけようとするものです(繰り返しますが、これらの祈りがどの神に向けられたものかを彼は特定していません)。しかし、祈りに関する彼の源はカトリックにあります。また、デニーンは、複数の研究結果が、アメリカの労働者階級において祈りの減少が自殺・アヘンの過剰摂取・アルコール関連疾患の増加と相関関係を示していることを強調しています。この「宗教の統合」の議論に日本社会への直接的な教訓があるかどうか、私はまだ確信が持ていませんが、より多くの祈りを奨励することは決して害になることはありません。

田中耕太郎の「自由主義批判」(一九三八年)

結論を述べる前に、廣池とよい対をなすであろうもう一人の戦前の日本の政治思想家、田中耕太郎に立ち戻りたいと思います。彼は一九三八年に *Japan Today* に「自由主義問答」という重要な、しかし見過ごされることの多い論文を寄稿しています。この論文で田中は、自由民主主義とその今日の日本についての価値を評価する上で不可欠であると私が考える、ある区別について述べています。

田中は、哲学的リベラリズムと政治的リベラリズムを区別す

ることを主張していますが、現代のポストリベラルの思想家たちは、これまで誰もそれをしようとしてきていません。彼は、哲学的リベラルは「すべての価値判断について自己を絶対の権威者であるとし、これについて何等の外部的権威をも認めない。正邪善悪の区別、美及び醜の判断等に関して自己一個人のみが唯一の権威者である。その結果として健全な常識や民族の確信や人類の通念は認容しない。それ等は皆外部的権威に由来するからである。この意味の自由主義者は人に説服せられないと共に、又人をも説服しようとしめない。彼れは個人主義者で、相対主義者である」と述べています。⁽²³⁾

田中は哲学的リベラルに共感していません。しかし「政治上の自由主義は必ずしも哲学上の自由主義とは一致するものではない。政治上の自由主義者は専制主義独裁政治に反対するすべての者を包含する。それは実際政治の技術に関するものである。それは国家社会に関する理念を実現する為に個人にどの程度の自由を認め、どの程度に政治に参与させるかの考慮に基づいてゐる」と指摘しています。⁽²⁴⁾

田中は、政治的自由主義について、私が冒頭で述べた難問、つまり共産主義に抵抗しようとする保守主義者にとって、日本における自由主義の価値とは何かということに結びつく、非常に重要な指摘をしています。彼は、「現今の立憲〔筆者注…明治憲法を指す〕政治の下に於て平等の地位を確保せられてゐる

各宗教は政治的自由を主張しそれを享受する。この意味でそれ等の宗教の信者は政治的には自由主義者である」と指摘しています。⁽²⁵⁾そして、政治的自由主義と専制主義の関係を、賢明でバランスのとれた方法で評価しています。

政治的自由主義は共産主義の破壊であり、(中略)政治的自由主義が行はれてゐる国では、内部的動機の看破が不可能である限り、言論及び結社の自由は共産主義の潜在的活動に利用せられないではない。しかしこのことは政治的自由の埒内に於て存在する総ての思想について云はれる。(中略)若し政治的自由主義が共産主義の温床となり得るとすればそれは矢張極右的国粹主義の温床にもなり得るのであり、(中略)のみならずそれは勿論よき政治運動の温床にもなる。だからして共産主義の温床になることがあると云つて政治的自由を排除することは角を矯めて牛を殺す譬に漏れない。⁽²⁶⁾

田中の視点からデニーンや他の現代のポストリベラル思想家について振り返ると、彼らと田中の決定的な違いは、彼らが政治的自由主義をリベラル・イデオロギーの現れとして貶める理想主義的な立場をとっている点にあることが分かります。それは実際にはイデオロギー批判の一形態であり、真のリベラルと

いうよりもマルクス主義者やポストマルクス主義者に共通する考え方です。法学者としての実際的な性質によって、田中は、人々がイデオロギーの道具ではなく、むしろ人々が用いる道具としてイデオロギーがあり、それはさまざまな方法で使用できるということに気づきました。

結論

リベラリズムとその問題点について私が述べようとしてきたことをまとめてみましょう。第一に、デニンや他の最近のリベラリズム批判者たちは、自分たちが非難するリベラリズムと同じ問題に陥っています。彼らは、自由民主主義の下で自由を確保できなかった理性を否定し、ポストリベラル社会の基盤として新しい道徳主義に目を向けています。

敵対するリベラリスト同様、彼らは国民の大多数が自分たちの道徳観を共有しているかどうかに驚くほど無関心です。実際、彼らの道徳観のほとんどが保守的なカトリック主義であり、アメリカ国民の二〇%以上はそうした価値観を持っていないと思われまます。おそらく、アメリカ人の二〇%にはるかに満たない人々が、このような見解を共有しているにすぎないでしょう。

これらのポストリベラリストはアメリカ人の中でも明らかに少数派であるため、民主的な手段で彼らの目標が実現されるこ

とはないでしょう。そして、彼らは理性の有用性を放棄しているのので、より多くの人々を説得して自分たちの道徳的原則を共有させる論理的な戦略を、あるいは修辭的な戦略さえ提供することはできないでしょう。

彼らは田中が指摘したように、彼らが敵対する、他者を説得することに関心がないリベラル派と同じなのです。一方でポストリベラルの知識人たちは、デニンの「アリスト・ポピュリスト」のような新しい支配階級の確立を呼びかけますが、この新しいアリスト・ポピュリスト階級がどのように形成され、影響力のある地位につくのかについてはほとんど明らかにされていません。

ある人々は明示的に、またある人々は暗黙のうちに、自分たちの道徳観を強制するためには「統合主義」、つまり自分たちの道徳的選好を力によって強制するカトリック国家によって実現しなければならぬと示唆しています。これは成功する戦略とは言えないでしょう。

それは、リベラリズムが生み出した最大の抑圧はエリート主義的でテクノクラートの国家であるにもかかわらず、自分たちもまた、今度は自分たちの価値観を反映した同様の強制的な国家を作ろうという彼らの考えに由来します。彼らは、リベラリズムがいかに理性に対する初期の信念を捨て、その後リベラル社会がいかに相対主義や真実への無関心に陥り、その過程

で、自分たちが望むものを得るために暴力も使う主義に忠実な暴徒を生み出してしまったかにはほとんど目を向けませんでした。

実際、彼ら自身、理性や説得を放棄し、むき出しの力によってのみ理想的な社会を実現できるかのように思っているようです。しかし彼らは、個人の自由や繁栄に対する最大の脅威は国家によってではなく自分たち自身によってもたらされるものかもしれないということを見落としています。アメリカ社会における暴力、殺人、犯罪などの増加は、リベラルな国家が育て上げたものではなく、投票は欲しいものを得るための手段であり、裁判所は財をめぐる対立を調整する場所であるという古典的でありベラルな原則をほとんど放棄してしまった国民がもたらしたもののなのです。そして、この圧倒的な暴力は左派からもたらされるのですが、ワシントンDCで起こった一月六日の暴動が示すように、ポストリベラルの右派もまた、そのそしりを免れません。

では、これらすべてのことから、日本はどのような教訓が得られるのでしょうか。特に日本人の大多数が神道を信奉しているという認識から、これらのポストリベラルの例に倣って、「信仰的確信をもつ人たち (integralist)」による神道国家を求める人もあるかもしれません。しかしこれもまた間違いでしょう。神道を信奉する人たちの間でさえ、多くの日本人が神権国

家を望んでいるとは（神道を信奉する人たちの間においてさえ）まったく明らかではありません。日本社会はアメリカほど、法の支配や理性による同胞の人たちの説得を否定しているわけではありません。

しかしこれは日本にも明らかに現存する脅威です。日本は、廣池と田中の助言に従うべきです。戦前の日本の知識人であるこの二人は異なる宗教的信条を持っていましたが、どちらも「自然の法則」あるいは「自然法」を信じていました。廣池が提唱した最高道徳は、世界の主要宗教に共通する道徳的基盤を求める学問であり、単なる神道や儒教の奨励ではありませんでした。そうであれば、廣池における最高道徳は、田中の自然法の探求と同じようなものとして見ることができます。

そして、民主主義が自然法の原則に制御されている限り、民主主義の実践の厄介な幅広く解釈できる性質は、異なる道徳的善を調和させ人々の必要を満たすための最良の手段であるという田中の指摘はまったく正しいのです。そうすれば日本は、自らの自由民主主義を守り、それを東アジアや世界に輝く光として保持することができますし、そうすべきです。間違いなく、現在の自由主義批判から得られるいくつかの教訓は、日本の民主主義の実践に取り入れることができるでしょう。

たとえば、社会的連帯への関心、地域文化の尊重、個人の尊厳、家族の重要性、そして個人と社会の福祉に貢献する宗教へ

のより大きな敬意などです。現在、日本では宗教に対する反感が高まっており、世界平和統一家庭連合（旧統一教会）がしばしばクローズアップされています。しかし私たちは田中のいうところの、言論の自由や集会の権利に偽装した扇動を利用する共産主義に惑わされないようにしなければなりません。日本における家庭連合や宗教に対する攻撃の背後には、このようなものが少なからずあるのではないのでしょうか。

これらの保守的なりベラリズム批判から得られる教訓は、いずれも日本で検討する価値のあるものです。しかしもう一つのパラドックスがあります。それは、彼らのリベラリズム批判は、彼らが示す代替案よりも説得力がある、ということなのです。幸い、総合的に見て日本は、古典的なりベラリズムの長所を残しながら、進歩主義の悪しき暴走に（今のところ）抵抗しているという点で、他の国よりもうまくやってきたように感じています。

多くの場合、日本はこうしたポストリベラルの理想を実現するという点において、世界の民主主義国家の中ですでに先を行っています。しかしもちろん、まだまだ道は遠く、特に社会の基盤である家族の再定義という点において、また現代の日本人の生活を「空虚さ」に至らしめた空虚な物質主義が残したギャップを埋めるためのより良い道徳システムを構築するという点で、日本の将来を脅かす危険は依然として存在しています。

す。

哲学的リベラリズムと区別される自由民主主義は完璧ではありませんが、私たちは決して完璧であることを良きものの敵にしてはなりません。別の言い方をすれば、ウインストン・チャーチルがかつて言ったように、「民主主義は最悪の政治形態である——これまで試されてきた他のすべてのものを除いては」ということでもあるでしょう。そして、歴史が証明しているように、日本における自由民主主義は、日本が過去に試してきた他の政治形態よりも優れていると私は考えています。

ご清聴ありがとうございました。

注

- (1) Hiroike Chikuro, *Towards Supreme Morality* (1928), II, p. 63. (廣池千九郎『新版道徳科学の論文』第九章第七項、四冊目一四四頁)
- (2) Hiroike, *Towards Supreme Morality* (1928), III, p. 137. (廣池同書、七冊目三二六頁)
- (3) Pierre Manent, *A World beyond Politics? A Defense of the Nation-State* (Princeton University Press, 2006).
- (4) Gladden Pappin, "From Conservatism to Postliberalism" (*American Affairs*, 2020).
- (5) Pappin, "From Conservatism to Postliberalism."
- (6) Paul Rahe, *Soft Despotism, Democracy's Drift* (2009), pp. 176-7.
- (7) Patrick J. Deneen, *Why Liberalism Failed* (Yale University Press, 2018, 2019), p. 3. (パトリック・J・デニン著、角敦子訳『リベ

- 「リブトはなぜ失敗したのか」原書房、二〇一九年、一七頁)
- (8) Deneen, *Why Liberalism Failed*, p. 3. (角訳書一七頁)
- (9) Deneen, *Why Liberalism Failed*, pp. 62-3. (角訳書八四—八五頁)
- (10) Deneen, *Why Liberalism Failed*, p. 157. (角訳書一九四頁)
- (11) Phillip Blond, “The Nationalist Mistake,” *Modern Age: A Conservative Review* (2022/2023), pp. 8-9).
- (12) Sohrab Ahmari, “Against David French-ism,” *First Things* (May 2019).
- (13) Ahmari, *The Unbroken Thread: Discovering the Wisdom of Tradition in an Age of Chaos* (Convergent Books, 2021); cited in Marek Jan Chodakiewicz, “A Missionary to Postmodern Savages,” *New Oxford Review* (May 2023), p. 41.
- (14) Hiroike, *Towards Supreme Morality*, I, p. 450. (廣池前掲書「四冊目二七九頁」)
- (15) Ahmari, *The Unbroken Thread*, cited in Chodakiewicz, p. 41.
- (16) Ahmari, *The Unbroken Thread*, cited in Chodakiewicz, p. 42.
- (17) Jacques Maritain, *Man and the State* (Washington DC: The Catholic University Press, 1998), p. 214.
- (18) Maritain, *Man and the State*, p. 213.
- (19) Deneen, *Regime Change: Toward a Postliberal Future* (Sentinel, 2023), p. 185.
- (20) Deneen, *Regime Change*, p. 198.
- (21) Deneen, *Regime Change*, p. 212.
- (22) Deneen, *Regime Change*, pp. 225-7. Quote is from page 225.
- (23) Kōtarō Tanaka, “Liberalism as a Japanese Problem” (*Japan Today*, June 1938; reprinted in Suzuki Sadami, ed., *Japan To-day Kenkyū senjiki Bungeishunju no kaigai hatsugen*, Kyoto: Kokusai Nihon Bunka Kenkyū Sentā, 2011), pp. 120-121. (田中耕太郎「自由主義問答」鈴木貞美編著『Japan To-day』研究—戦時期『文藝春秋』の海外発信』、国際日本文化研究センター、二〇一一年、一二二頁)
- (24) Tanaka, p. 121. (田中耕太郎「同上」一二二頁)
- (25) Tanaka, p. 121. (田中耕太郎「同上」一二三頁)
- (26) Tanaka, p. 121. (田中耕太郎「同上」一二三頁)